

ペフエニウム・ハイドロオキシフトエイト, 四塩化エチレン, 1・プロモ・ナフトール
(2) 及び 4・ヨードチモールの人鉤虫に対する駆虫効果の比較研究

吉田 幸雄 中西 靖郎 島谷 敏郎 松尾 喜久男

(京都府立医科大学医動物学教室)

1958年 Goodwin によつて紹介された新鉤虫駆虫剤 Bephenium hydroxynaphthoate (以下 BH と略) は其の後, Young (1958), Nazir Ahmad (1959), Nagaty (1959), 森下ら (1960) 等によつて人鉤虫についての効果の追試が為された. 著者等も Goodwin 博士からが本剤の提供を受け, 之と従来の鉤虫駆虫剤の主なもの 3 種と比較研究を行つた(四塩化エチレン, 1・プロモ・ナフトール(2), 4・ヨードチモールは以下夫々四エ, BN, IT と略す). 実験時期は昭和 34 年 8 月, 実験地区は京都府北部久美浜である.

先ず薬量は BH は ion として 4.0 g と 2.5 g (アルコール製剤として夫々 8.0 g, 5.0 g となる), 四エは 4.5 g, BN は 8 g (オーミン製剤として 12 g), IT は 6.0 g (チモラン製剤として 12 g) の如くで, 各薬剤共下剤併用群と下剤ぬきの群とに分けたので計 10 群が出来た. 投薬方法はいずれも朝空腹時頓用とした.

下剤併用群については瀉便を行つて成虫を得て検査した所ゾビエ鉤虫 (以下 A.d. と略) の単独感染者 22 例, アメリカ鉤虫 (以下 N.a. と略) の単独感染者 27 例, 両種混合 18 例であり, 排出虫体数の上では A.d. 278 隻に対し N.a. 1,062 隻であつた. 又当地区の鉤虫寄生率は 32.9% であつた.

各群の鉤虫卵陰転率を一括して記すると次の如くである.

BH 4.0 g	下剤併用	52.9 %	BH 4.0 g	下剤ぬき	50.0 %
BH 2.5 g	下剤併用	36.8 %	BH 2.5 g	下剤ぬき	50.0 %
四エ 4.5 g	下剤併用	30.0 %	四エ 4.5 g	下剤ぬき	47.1 %
BN 8.0 g	下剤併用	62.5 %	BN 8.0 g	下剤ぬき	76.6 %
IT 6.0 g	下剤併用	18.2 %	IT 6.0 g	下剤ぬき	23.8 %

上述の成績につき χ^2 テストを行つた結果各薬剤について下剤の有無による効果の有意差はない. BH 4.0 g と 2.5 g との間にも有意差はない. 又 BH と四エの間には有意差はないが BH と BN の間及び BH と IT の間には有意差が認められた.

次に上述 4 薬剤が A.d., N.a. の種の違いにより効果に差があるかどうかを検査した所, 四エは A.d. に対し 33.3% (陰転率, 以下同じ), N.a. に対しては 54.5%, IT は夫々 16.7%, 50% と N.a. に対して効果が高く, BN は夫々 85.8%, 87.5% と同程度で且高い. 一方 BH は A.d. に対し 58.2%, N.a. に対しては 36.8% と従来の薬剤の反対の数値を示しこの事は興味深い.

BH は又人蛔虫にもかなり良好な駆虫効果が認められ今回の実験では 2.5~4.0 g 1 回頓用で 50.0~57.8% の陰転率を示した.

副作用について四エ, BN, IT 等は従来くわしく検討されており, 今回の調査成績もほぼそれらと同様であつたが一方 BH の副作用も危険なものは全くなく集団駆虫剤として充分使用出来るものと考えられた.